

年 組 名前：

# 「よのなか科」通年課程に

## 都留高 地域住民と協働

都留高は本年度、教育改革実践家で、県特別顧問の藤原和博さんを招いた特別授業「よのなか科」に取り組んでいる。来年度以降は同校の教諭が受け持つことと継続する予定で、県教委によると、よのなか科の手法を取り入れ、学校独自で年間を通じたカリキュラムを組むのは、他校に例はない。生徒が地域住民と共に取り組んでいて、コミュニティスクール導入を検討している同校は、協働的な学びの場づくりを目指している。

〈赤池悠〉

よのなか科は、ブレインストロミングやディベートを通して、キャリアや学校生活に関わるテーマや、社会や地域の課題に向き合う。正解が一つではない問いに対して、対話を通じて思考を深めていく。

本年度は2年生や地域住民を対象に、通常授業の枠内で年間21回のプログラムで開講。テーマは「制服の是非」「少子化問題」「自身の進路について」など多岐にわたる。14回目となった10月30日は、県内で議論が分かれている「富士登山鉄道の是非」を扱った。約70人が参加し、6

人ごとのグループ内で、メリット・デメリットを列挙し、賛成と反対に分かれて討論。それぞれ立場を変えながら繰り返し討論を行い、多角的に考えられるようにした。

小林そよかさん(17)は「さまざまな人と話し合いをすることで、自分では気付かなかった視点を持てる」と意義を語る。

来年度は、藤原さんと一緒にファシリテーターを担っている、同校で数学科を担当する松田和真教諭(35)がよのなか科を受け持つ。独立系ファイナンシャルプランナーの資格も持つ松田教諭は、金融教

育や起業家精神の養成にも力を置く予定。松田教諭は「地域の人たちの力を借りながら、ためらうことなく自身の意見を表現できる力を高める授業にしたい」と話している。

(2023年11月7日付 山梨日日新聞 18面)

### 問1

都留高校は、さまざまな人を招いて、特別授業「よのなか科」に取り組んでいます。同校は、どのような学びの場づくりを目指していますか。

.....

### 問2

「よのなか科」は、どのような方法で、どのようなテーマや課題に向き合いますか。

- ・方法： ..... や .....
- ・テーマ： ..... や .....
- ・課題： ..... や .....

### 問3

14回目のテーマと、どのように進めて行ったか教えてください。

- ・テーマ： .....
  - ・進め方： .....
- .....